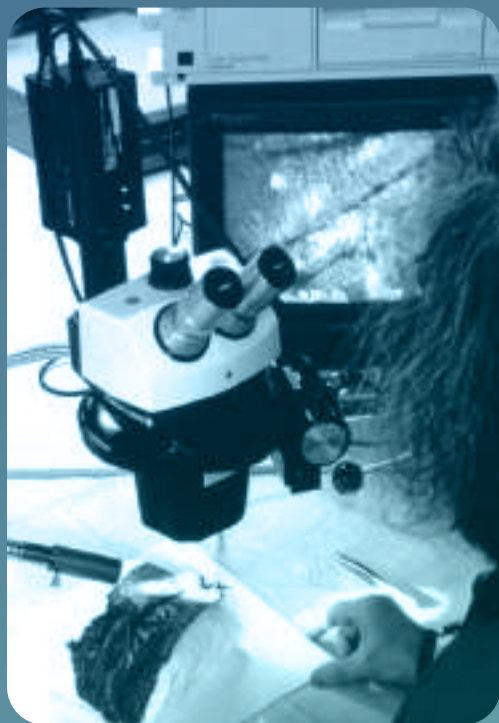




伝統芸能文化創生プロジェクト 2017年度 事業報告書

伝統芸能アーカイブ&リサーチオフィス (TARO)

創生プロジェクト
伝統文化
伝芸文



伝統芸能文化を

未来へ

Traditional Arts

Archive

&

Research

Office

伝統芸能アーカイブ&リサーチオフィス (TARO)

目 次

1. 伝統芸能文化創生プロジェクトについて	p.1
2. 伝統芸能文化とは	p.2
3. 実施事業一覧	p.3
4. 実施事業	
a. ネットワーク構築に向けたヒアリングとアーカイブ調査 (50音順)	p.4 - p.7
< 東京 >	
株式会社宮本卯之助商店	
公益財団法人日本伝統文化振興財団	
公益財団法人ポーラ伝統文化振興財団	
国立能楽堂（独立行政法人 日本芸術文化振興会）	
伝統芸能の道具ラボ	
独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所無形文化遺産部	
文化庁文化財部伝統文化課	
< 京都市、京都府 >	
京都市産業観光局商工部伝統産業課	
京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課	
京都市歴史資料館	
京都伝統産業ふれあい館（公益財団法人京都伝統産業交流センター）	
公立大学法人京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター	
国際日本文化研究センター（日文研）	
地方独立行政法人京都市産業技術研究所	
福知山伝統文化を守る会（NPO 法人丹波漆、福知山藍同好会（由良川藍）、丹後二俣紙保存会（丹後和紙））	
文化庁地域文化創生本部	
< その他 >	
公益財団法人鼓童文化財団	
公益財団法人札幌市芸術文化財団	
独立行政法人国立文化財機構アジア太平洋無形文化遺産研究センター	
b. 保存修復に関するリサーチ	p.8
— 先覚に聴く	
c. 古典芸能に新たな光をあてたシンポジウム	p.9
— 落語 The シンポジウム	
d. 古典芸能の創生のための総合イベント	p.10 - p.11
— 三味線三昧	
e. 市民向け講座	p.12 - p.13
— 講座シリーズ	
# 1 フリースタイルな僧侶たちの声明	
# 2 無形文化遺産ってなに？	
# 3 女流義太夫を知る	
f. 受託事業	p.14 - p.15
— 札幌市教育文化会館 40 周年記念事業 金剛流能『松風 見留』	
— 狂言を取り入れた消費者啓発イベント 消費者問題を狂言で考えよう	

1 伝統芸能文化創生プロジェクトについて

■ 「伝統芸能文化創生プロジェクト」と「伝統芸能文化センター」構想

「伝統芸能文化センター」は、2011年に京都市が策定した「国立京都伝統芸能文化センター（仮称）基本構想」（素案）に示されている“伝統芸能文化の継承・創造の拠点施設”です。センターが備えるべき機能として以下の6つが掲げられています。

- 1 伝統芸能に関する学術研究
- 2 伝統芸能に関する創造・普及
- 3 楽器・用具用品に関する相談・支援
- 4 ネットワーク・コーディネート
- 5 全国発信・地域間交流
- 6 海外発信・国際交流

この6つの機能の実現のため、先行的に実施した2007～2013年度の「京都創生座」や2009～2016年度の「五感で感じる和の文化事業」では、流派を越えて伝統芸能の持つ力を引き出す創作・公演や、国内外への発信・交流、市民への普及等に取り組んできました。その成果を引き継ぎ、2017年度からは「伝統芸能文化創生プロジェクト」として、上記の6つの機能を更に強化するための活動を行っています。この「伝統芸能文化創生プロジェクト」を推進する主体となるのが、京都市と京都芸術センターから成る伝統芸能アーカイブ&リサーチオフィス（TARO）です。

■ 伝統芸能アーカイブ & リサーチオフィス （Traditional Arts Archive&Research Office 略称:TARO）

TAROは、「伝統芸能文化センター」に必要とされる機能の確保・強化に取り組む事務局として2017年に京都芸術センター内に設置しました。伝統芸能の継承や保存、用具・用品とその材料の確保、普及・創造・発信活動など、伝統芸能文化の総合的な活性化の観点から、ネットワークの構築や基礎調査等を進めています。

■ 「伝統芸能文化センター」構想の経緯

2003年度	京都創生懇談会より「国家戦略としての京都創生の提言」提出
2004年度	「歴史都市・京都創生策」策定
2006年度	京都創生研究会「国立京都伝統芸能文化センター（仮称）」分科会を設置。2008年度まで検討（全9回開催） 「歴史都市・京都創生策II」策定→国へ要望 「京都文化芸術都市創生計画」策定→「国立京都伝統芸能文化センター（仮称）の整備」が重点課題に
2007年度	「京都創生座」事業の実施（～2013年度）
2009年度	「五感で感じる和の文化事業」の実施（～2016年度）
2011年度	「国立京都伝統芸能文化センター（仮称）基本構想（素案）」策定→国へ要望（以降、毎年度要望） 「京都文化芸術都市創生計画 改訂版」策定→重要施策群1：継承と創造に関する人材の育成等に位置付け
2013年度	「創生劇場」の実施（～現在）
2014年度	「京都文化芸術プログラム2020」策定→プログラムを牽引する重要事業に位置付け
2016年度	「第2期 京都文化芸術都市創生計画」策定→8つの最重要施策のうちの1つに位置付け
2017年度	「伝統芸能文化創生プロジェクト」の実施 「伝統芸能アーカイブ&リサーチオフィス」を京都芸術センター内に設置

2 伝統芸能文化とは

TARO が対象とする伝統芸能文化は、古典芸能や民俗芸能、これらに不可欠な楽器・用具用品及びその材料、その製作に係る伝統工芸技術に至るまで、極めて多岐にわたります。

伝統芸能文化創生プロジェクトでは、以上のように「伝統芸能」に係る多くの分野を総合した概念として「伝統芸能文化」という名称を用いています。

歴史を通じて形成されてきた精神性、美的感性、文化的価値が総合的に凝縮されている伝統芸能文化は、言語や文学の伝統と同様に失ってはならないかけがえのないものです。

	古典芸能	民俗芸能
伝承者と鑑賞者	専門の実演家によって、目の肥えた観客を相手に演じられてきた。	芸能専業ではない伝承者によって、信仰行事の一環として、神仏に奉納するために演じられてきた。
内容	日本で近世以前に創始され、現在も伝承・実演されている芸能。能・狂言・歌舞伎・文楽・日本舞踊・邦楽・落語・講談・浪曲・漫談など。	五穀豊穡・長寿・悪疫退散などを神仏に祈って行われる民間の信仰行事に伴い、各地域社会で伝承されてきた芸能や、その他、広い意味での儀礼・祭礼・年中行事など。
上記に係る楽器・用具用品、材料や伝統工芸技術等		
古典芸能、民俗芸能に用いられる楽器・用具用品、またはそれらを作るために必要な材料や伝統工芸技術など。		



3 実施事業一覧

重点課題

- ・関係施設・機関とのネットワーク構築に向けたヒアリング
- ・学術研究分野のアーカイブ調査
- ・市民向けのイベントを通じた普及活動

次年度に向けた課題

- ・伝統芸能文化に係る相談対応
- ・ネットワークの更なる構築
- ・伝統芸能文化の活性化、それに係る道具等の復元・開発に対する具体的な取り組み

実施事業

a. ネットワーク構築に向けたヒアリングとアーカイブ調査

保存、継承、普及等に取り組む施設・機関とネットワークを形成するため現地を訪問し、伝統芸能文化の創生のために連携して取り組むべき課題を明確にすることを試みました。また、学術研究機関のアーカイブの方法とその内容を調査しました。

<東京>

株式会社宮本卯之助商店、公益財団法人日本伝統文化振興財団、公益財団法人ポーラ伝統文化振興財団、国立能楽堂（独立行政法人 日本芸術文化振興会）、伝統芸能の道具ラボ、独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所無形文化遺産部、文化庁文化財部伝統文化課

<京都市、京都府>

京都市産業観光局商工部伝統産業課、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課、京都市歴史資料館、公立大学法人京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター、京都伝統産業ふれあい館（公益財団法人京都伝統産業交流センター）、国際日本文化研究センター（日文研）、地方独立行政法人京都市産業技術研究所、福知山伝統文化を守る会（NPO 法人丹波漆、福知山藍同好会（由良川藍）、丹後二俣紙保存会（丹後和紙））、文化庁地域文化創生本部

<その他>

公益財団法人鼓童文化財団、公益財団法人札幌市芸術文化財団、独立行政法人国立文化財機構アジア太平洋無形文化遺産研究センター

b. 保存修復に関するリサーチ

アーカイブやデータとして残りにくい個人の経験・記憶に焦点を当てたインタビューを実施しました。

—先覚に聴く

c. 古典芸能に新たな光をあてたシンポジウム

古典芸能の分野外から研究者・識者を招き、現代における継承・創造の可能性を探りました。

—落語 The シンポジウム

d. 古典芸能の創生のための総合イベント

三味線に関して、道具・楽器製作から音楽の種類まで総合的に市民の皆様に紹介しました。

—三味線三昧

e. 市民向け講座

伝統芸能に対する市民の関心を高めるため、専門家を講師に招いた講座を開催しました。

—講座シリーズ

- # 1 フリースタイルな僧侶たちの聲明
- # 2 無形文化遺産ってなに？
- # 3 女流義太夫を知る

f. 受託事業

- 札幌市教育文化会館 40 周年記念事業 金剛流能『松風 見留』
- 狂言を取り入れた消費者啓発イベント 消費者問題を狂言で考えよう

4 実施事業

a ネットワーク構築に向けたヒアリングとアーカイブ調査

伝統芸能文化の保存・継承・普及・アーカイブ等に取り組む下記の機関・施設を訪問し、情報を共有した上で連携して取り組むべき課題について話し合いました。

※50音順

東京

株式会社宮本卯之助商店

文久元年（1861年）創業。神輿や太鼓、祭礼具の数々を製造販売している。時代の変遷の中で伝統的な製法に改良を重ねつつ、「義を重んじる、正しいことを行う」という意味を持つ社は「重義」の精神を守り続け、日本の佳き伝統とともに歩み、祭と伝統芸能の保存と発展を支えている。御神輿・御宮・神社仏閣太鼓・祭礼山車太鼓・民族芸能太鼓・能楽雅楽器・祭礼具の製造販売や、修理・復元からレンタルまで幅広く取り組んでいる。

公益財団法人日本伝統文化振興財団

アーカイブ調査

ビクターエンタテインメント株式会社を基金元として1993年に設立された公益法人。2005年7月より財団名称を「ビクター伝統文化振興財団」から「日本伝統文化振興財団」に変更。「歴史的音盤アーカイブ推進協議会」（HiRAC）の創設メンバーとして、国内で製造された明治以来のSPレコードに収録された音楽・演説・演芸など約5万音源のデジタル化を進め、国立国会図書館のデジタルライブラリーに収めた。毎年、伝統芸能分野のアーティストを1名顕彰する「日本伝統文化振興財団賞」や、邦楽古典継承者育成のため、レコーディング、CD発売の機会を提供する「邦楽技能者オーディション」など、顕彰・助成事業にも積極的に取り組んでいる。

公益財団法人ポーラ伝統文化振興財団

ポーラ創業の50周年（1979年）を機に設立された、伝統工芸技術、伝統芸能、民俗芸能などの無形の伝統文化の保存・伝承・振興に取り組む財団。2011年には公益財団法人に移行した。「伝統文化ポーラ賞」では、伝統工芸技術、伝統芸能、民俗芸能・行事などの各分野における貢献者・団体を毎年顕彰している。「伝統文化記録映画」は、歴史的な記録というよりも普及の色合いが強い記録映画で、「伝統工芸の名匠」「伝統芸能の粋」「民俗芸能の心」シリーズから成る。また、記録や研究、保存・伝承活動で成果が期待できるものに対し、助成事業を行っている。

国立能楽堂（独立行政法人日本芸術文化振興会）

国立能楽堂は、能楽の保存と普及を図ることを目的として1983年9月に設立。自主公演として「定例公演」と「普及公演」がある。また、能の装束や小道具、面などの展示や、中学・高校生を対象とした「能楽鑑賞教室」等を通じて多角的に能楽を親しむ機会を提供している。日本芸術文化振興会が取り組む後継者養成事業として、ワキ方、囃子方（笛、小鼓、大鼓、太鼓）、狂言方の研究生を募集し伝承者の養成に取り組んでいる。最近では、海外からの観光客へ向けて、日本初の座席字幕表示システムを導入した。能楽に関する図書や映像の収集・保存・公開も行っている。

伝統芸能の道具ラボ

日本の伝統芸能に用いる道具類の希少技術を未来へ継承することを目標とし、日本の伝統芸能に用いる道具類の技術を保存し活用するためのネットワーク・プラットフォームを構築することや、衰退した道具を復元させる「調査・分析・復元」のスキームを確立し、技術継承の新しいモデルを生み出すことに取り組む。また、伝統芸能の道具の作り手が安定して仕事ができるためのよりよい環境づくりにも取り組む。

独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所無形文化遺産部

アーカイブ調査

日本の無形文化財、選定保存技術、無形民俗文化財に関する基礎調査・研究を行っている。音声・映像による記録方法については、作成とともに新たな手法開発にも取り組んでいる。また、有形とは異なる無形文化財の「防災」の一環として、「地方指定等文化財情報に関する収集・整理・共有化事業」に取り組んでおり、無形文化遺産情報ネットワーク協議会の開催を通じて、全国の無形文化遺産の情報を収集し、データベース化および関連データのアーカイブ化を進めている。そのパイロット版として、和歌山県を対象とした「無形文化遺産アーカイブス」(<http://mukeinnet.tobunken.go.jp/group.php?gid=10027>)を2017年10月から公開している。

文化庁文化財部伝統文化課

文化財保護法に基づき、無形文化財、民俗文化財及び文化財の保存技術の保存及び活用に関する業務を担当するほか、文化財の保存及び活用に関する総合的な政策の企画や立案、文化財類型ごとに展開される保護施策の総合調整、アイヌ文化の振興、文化遺産の国際交流に関する業務を所管。

京 都

京都市産業観光局商工部伝統産業課

京都市では、2005年10月15日に施行した京都市伝統産業活性化推進条例に基づき、条例第2条に規定する京都市の伝統産業について、74品目を伝統産業製品として定めている。また、条例に基づき、京都の伝統産業の活性化を推進する取組を計画的に実施するために「京都市伝統産業活性化推進計画」を策定。2017年3月に第3期の計画を策定し、首都圏・海外での販路開拓や後継者の育成など、京都の伝統産業の活性化に向けて取組を推進している。

京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課

京都市の貴重な市民の財産である文化財を次の時代に継承していくために、京都市文化財保護条例に基づき、市内の文化財を指定・登録し、その維持、継承、活用に取り組んでいる。大きくは、建造物、美術工芸品（絵画、彫刻、工芸品、書跡、典籍、古文書、考古資料、歴史資料）の「有形文化財」と、芸能、工芸技術などの「無形文化財」、衣食住や生業、信仰等に関する風俗慣習、民俗芸能、民俗技術、それらに用いられる用具などの無形、有形にまたがる「民俗文化財」、史跡、名勝、天然記念物の「記念物」、歴史的風致を形成する「伝統的建造物群」、そして「埋蔵文化財」に分かれている。また未指定も含めた文化財一般についての相談にも応じている他、京都市の無形民俗文化財の映像DVDやビデオを無料で貸し出ししている。

4. 実施事業

a. ネットワーク構築に向けたヒアリングとアーカイブ調査

京都市歴史資料館

アーカイブ調査

京都市民から寄贈・寄託された、多くの古文書などが蓄積されていた「京都市史編さん所」を前身として、1982年に開館した。貴重な史料の保存のほか、京都市の歴史資料の更なる収集と調査研究を行っており、その成果を年4回程度の企画展・テーマ展で紹介している。また、京都の歴史に関する専門図書や、所蔵している古文書の複写資料を公開している。

京都伝統産業ふれあい館（公益財団法人京都伝統産業交流センター）

京都の伝統工芸品73品目、約500点を一堂に集め、その優れた価値や魅力を体系的に紹介する国内でも有数の展示場。職人の実演公開や、伝統工芸の体験の場を提供したり、若手技術者の作品発表や異業種交流の場として伝統産業をめぐる新しい提案を行っている。

公立大学法人京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター

アーカイブ調査

2000年に開設した、日本の伝統音楽を総合的に研究する国内唯一の公的研究機関。国内外の研究者、研究機関、演奏家とも提携することで、研究成果や情報を共有し、交流の拠点となることを目指している。解説や実演を交えて市民向けに紹介する公開講座やセミナーも開催している。日本の伝統音楽に関する文献や音響映像、楽器、絵画資料の収集、整理、保存にも力を入れており、実演家から寄贈された楽譜公開のほか、寄贈を受けたSPレコードのデジタルデータをウェブ上「伝音アーカイブズ」で公開している他、多数のアーカイブを有している。

国際日本文化研究センター（日文研）

アーカイブ調査

日文研は、世界の日本研究者を支援するための大学共同利用機関。日文研が所蔵する浪曲SPレコード約1万4千枚のデジタルアーカイブを担当する古川綾子特任助教にヒアリングを行い、デジタル化の工程を視察した。他にも日文研には図書館に加えて、怪異・妖怪や、和歌、連歌など多様な分野のデジタルベースを有している。

地方独立行政法人京都市産業技術研究所

京都市が設立した公的な産業支援機関。京都市の政策・行政サービスのうち、地域産業の発展を促すための運用部門（試験分析・研究開発・人材育成・技術支援指導）を担っている。研究所は、高分子系チーム、金属系チーム、窯業系チーム、製織システムチーム、バイオ系チーム、表面処理チーム、デザインチーム、色染化学チームの8つの研究チームからなる。京友禅染・西陣織・染色・陶磁器・漆工を中心とした伝統産業技術後継者育成研修も行っており、修了生は13,000人以上に及ぶ。

福知山伝統文化を守る会

京都府福知山市の伝統工芸を担う3団体「丹後二俣紙保存会」、「NPO法人丹波漆」、「福知山藍同好会」によって、後継者育成を目的として2016年に結成。和紙の楮（こうぞ）、漆の木、由良川藍といった原材料の栽培から製作まで、すべての工程を福知山市内で行っている。TAROは、これら3団体の取り組みや福知山市の伝統文化の現状の調査を行った。



NPO 丹波漆理事長 岡本嘉明、漆の木の植樹地にて

文化庁地域文化創生本部

文化庁の京都への本格移転に向けた準備とともに、観光・まちづくりなど文化関連分野と積極的に連携するなど、これまでの文化行政の枠組みにとらわれず、文化庁に期待される新たな政策ニーズに対応した事務・事業を地元の知見やノウハウ等を生かしながら先行的に実施。

1. 総括・政策研究グループ …… 本部の総括、文化に関する政策調査研究、国際文化交流等を実施。
2. 暮らしの文化・アートグループ …… 地域の幅広い文化芸術資源の活用による地方創生、経済活性化、共生社会実現への貢献及び人材育成、伝統工芸や生活文化に関する調査研究等を実施。
3. 広域文化観光・まちづくりグループ …… 文化財等を生かした広域文化観光及びまちづくりの推進、これらに関するモデル開発等を実施。

その他

公益財団法人鼓童文化財団

佐渡に日本の民俗芸能を学ぶ場をつくるために、1971年「佐渡の國鬼太鼓座」を旗揚げし、島内の廃校を住居に集団生活を営みながら太鼓の活動を始めた。1981年に太鼓芸能集団「鼓童」が設立。1997年に「鼓童」の活動を社会教育や地域還元重点においた活動を行うために、公益財団法人鼓童文化財団が設立された。全国から集まる太鼓研修生の養成も行っている。また、地域フェスティバル＝アースセレブレーションの企画立案を行う他、佐渡太鼓体験交流館（たたこう館）を拠点に小学生や中学生、地域の高齢者を対象にした太鼓体験ワークショップ等を開催している。地域文化に関する資料や映像収集および展示も行っている。



佐渡太鼓体験交流館（たたこう館）

公益財団法人札幌市芸術文化財団

札幌市芸術文化財団は、札幌市の指定管理者として「札幌芸術の森」「本郷新記念札幌彫刻美術館」「札幌コンサートホール Kitara」「札幌市教育文化会館」「札幌市民ギャラリー」「札幌市民交流プラザ」を運営しており、札幌市民への芸術文化の普及に取り組んでいる。TARO は、札幌市教育文化会館の「教文古典芸能シリーズ」で能楽を中心とした公演やレクチャーを共同開催している。

→受託事業 (p.14) もご参照ください

独立行政法人国立文化財機構アジア太平洋無形文化遺産研究センター

ユネスコのカテゴリー2センターとして2011年10月に大阪府堺市博物館内に設置された。国内外の大学、研究機関、博物館、地方自治体、政府およびNGOなどと連携し、特にアジア太平洋地域の発展途上国における無形文化遺産保護に関する研究のマッピング、データベースの構築、法制度の研究などを行なっている。

b 保存修復に関するリサーチ

— 先覚に聴く

実演家や職人へ焦点をあてたインタビュー

日時	2018年3月10日(土) 15:00-17:00
会場	京都芸術センター フリースペース
講師	梶谷宣子 (メトロポリタン美術館終身名誉館員/染織修復家) 栗田純司 (株式会社栗田建設取締役会長/穴太衆積み石匠)
司会	小林昌廣 (情報科学芸術大学院大学教授)



美術品・建築修復の先駆者である二人の職人、メトロポリタン美術館で染織品の保存修復に勤めてきた梶谷宣子氏と、石垣積みを専門とする技術者集団「穴太衆(あのうしゅう)積み」第十四代目石匠の栗田純司氏を招き、それぞれの修復方法やこれまで携わってきた事例をうかがった後に、お二人の復元の捉え方の違いや共通点について議論を深めました。

1966年から2003年までメトロポリタン美術館の館員であった梶谷氏は、まだ当時この美術館で確立していなかった染織品の管理・修復方法の整備に尽力されました。梶谷氏はこの美術館で、古代から現代に到るまで世界中の染織品の調査を行い、科学者と共に染織品保全部の創設と発展に貢献されました。科学的な手法と職人的な手仕事の両方を導入することによってメトロポリタン美術館の染織品のメンテナンスの質の高さが保たれています。

一方、栗田氏は「穴太衆積み」の技術を継承する家系に生まれ、大学で土木工学を学んだ後、十三代目石匠で人間国宝の父の下で修業を積まれました。土木工学的な見地から父の仕事を理解して真似ようとしても上手くいかない時に、「石の声を聴け」と言う父の姿勢を見習ううちに石との対話を学んだと言います。

両者ともに科学的手法を踏まえながら、職人としての経験則やモノそのものと向き合う姿勢を重要視しています。しかし、当時の素材や技法で修復を行うことを原則とする梶谷氏に対して、栗田氏は、不安定な積み方の石垣であった場合には、より頑丈に修復する提案を行うように、基本的な考え方に違いがあることがわかりました。そこには博物館品としての染織品と、実用品としての石垣という対象の違いも作用していますが、修復という行為の本質的なジレンマが表れているように思われました。

C 古典芸能に新たな光をあてたシンポジウム

— 落語 The シンポジウム

伝統芸能文化に対して芸能の分野外から光をあてるシンポジウム

日時	2018年2月3日(土) 14:00-17:30
会場	京都芸術センター 大広間
登壇者	藤山直樹(上智大学総合人間科学部心理学科教授/精神分析家) 大田純寛(NHK「超入門!落語 THE MOVIE」エグゼクティブプロデューサー)
司会	小林昌廣(情報科学芸術大学院大学教授)



今回のテーマは落語。精神分析家ならではの視点から根多(ネタ)と落語家の裏側に迫った著書『落語の国の精神分析』で知られる藤山直樹氏と、話芸によって聞き手に想像させる落語をあえて「映像化」することで話題を集めているNHK番組『超入門!落語 THE MOVIE』のプロデューサー大田純寛氏の二名をシンポジストにお招きしました。

藤山氏の講演では、「落語」と「精神分析」の本質的つながりとして、「孤独」と「分裂」をもちこたえる専門家と、受け手である非専門家によってなされる点があげられました。「落語の国」という領域、「精神分析の場」に入るためには、パーソナルな領域を巻き込んだ修業が必要ですが、そこに安住しないことが真の落語、精神分析というできごとを生むのだと言います。しかし、藤山氏によれば、「芸術家」のエトスを落語の国に持ち込んだためにそこから亡命しなければならなかった立川談志の例が、精神分析家にとっても示唆的であるということについて説明がなされました。

一方、大田氏の講演では、『超入門!落語 THE MOVIE』の番組制作の過程について詳しく説明がなされました。そもそもこの番組は、BSP番組「たけしのこれがホントのニッポン芸能史」で「落語にアテブリ芝居をかぶせる」実験企画から始まったのだと言います。落語の魅力をテレビ的にわかりやすく表現するために、噺家が演じる落語の音声に合わせて俳優陣がアテブリ、つまり「口パク」で芝居を演じるという発想で、「リップシンク」に徹底的にこだわって制作されました。基本的な番組制作の流れとしては、落語家の師匠との打ち合わせから始まり、高座に実際にお客様を入れての落語収録、噺のイメージに合致し企画意図をご理解くださる俳優さんのブッキング、台本作り、ロケ、編集という段階を踏みますが、噺の内容に応じて異なる問題が発生します。こうした試行錯誤について、各回の番組を上映しながら解説がなされました。

d 古典芸能の創生のための総合イベント

— 三味線三昧

日本を代表する弦楽器である三味線に係る技術の持ち主が一堂に集い、三味線を総合的に紹介しました。



日時 | 2018年2月4日(日) 13:00-17:00

会場 | 京都芸術センター 講堂

第一部 道具製作の紹介

原糸製造 佃三恵子
(木之本町邦楽器原糸製造保存会 [邦楽器原糸製造 選定保存技術保存団体])

糸製作 小篠敏之
(株式会社鳥羽屋 代表取締役、邦楽器糸製作 選定保存技術保持者)

棹製作修理 今井伸治
(今井三絃店五代目)

第二部 演奏&トーク

長唄三味線 杵屋勝七郎

柳川三味線 林美音子

新内節三味線 新内枝幸太夫

義太夫三味線 鶴澤清志郎

津軽三味線 柴田雅人

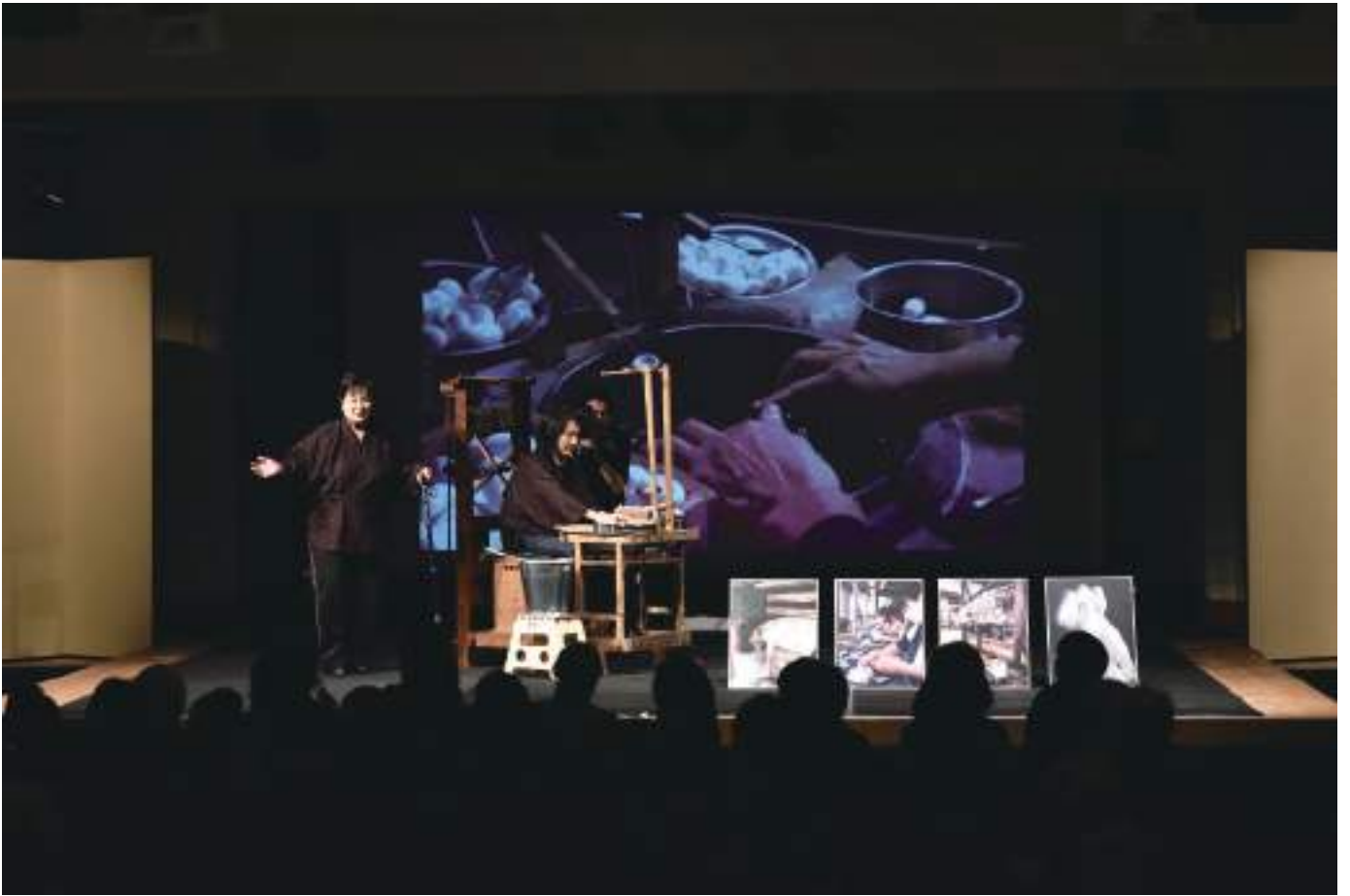
道具・楽器製作者が原糸製造、糸製作、棹製作修理の解説・実演を行った後で、長唄三味線、柳川三味線、新内節三味線、義太夫三味線、津軽三味線といったそれぞれの音楽の種類について、演奏者が実演を交えながらお話ししました。

第一部の道具製作の紹介では、実際の作業道具や紹介映像を用いて各工程の解説がなされました。生糸を紡ぐ「ダルマ」と呼ばれる繰り製糸機を用いた作業の実演。撚糸、染色、糊煮込、乾燥などの絃製作について、実物と映像を用いた解説。棹や胴に用いられる紅木(こうき)という木や猫の皮の特性等についての説明を交えながら、皮張りの作業を公開しました。

続く第二部では、柳川三味線、義太夫三味線、長唄三味線、新内節三味線、津軽三味線の演奏を聞き比べながら、それぞれの音楽の特徴について解説がなされました。最後の「お題三味線」では、「春」というお題からそれぞれが連想する曲を演奏し、会場は大いに盛り上がりました。

材料から楽器が作られる工程を知り、それを使って演奏される各種音楽の違いを聴き比べることができる貴重な機会となりました。





▲ 第一部 道具製作の紹介



▲ 第二部 演奏&トーク

e 市民向け講座

講座シリーズ

「講座シリーズ」は、専門家や活動団体、研究機関とのネットワークから毎回異なる講師をお招きし、独自の切り口で伝統芸能文化を紹介する講座です。

講座シリーズ #1 「フリースタイルな僧侶たちの声明」

日時	2017年7月29日(土) 15:00-16:30
会場	一念寺(京都市下京区東中筋通花屋町下る柳町324)
講師	竹林真悟(フリースタイルな僧侶たちメンバー/浄土真宗本願寺派僧侶) 若林唯人(フリースタイルな僧侶たち代表/浄土真宗本願寺派僧侶)



関西を中心に活動しているお坊さんの団体「フリースタイルな僧侶たち」のメンバーを講師としてお招きし、声明(しょうみょう)に焦点を当てました。

キリスト教には讃美歌を歌う聖歌隊があるように、仏教にもお経に節をつけて歌う専門の僧侶がいました。お能や狂言といった日本の伝統的な声楽の多くは、この声明(唄うお経)をルーツに持っていると言われています。節をつけられたお経がたくさんの人によって唱えられると、お能の謡と同様に倍音が増幅されて独特の濃密な音楽空間が作り出されます。今回の講座では、声明についてお話いただいた後、参加者の皆さんと一緒に実際に声を出して声明を体験しました。

「フリースタイルな僧侶たち」とは

「お坊さん＝お葬式」というイメージが定着しています。しかし、仏教にいま求められているのは、お葬式だけのお寺とのつきあいではなく、先行きが見えず生きにくい社会を、心安らかに生きられる社会に変えて欲しいということではないでしょうか。その期待に応えるために、「フリースタイルな僧侶たち」は、既存概念に固執することなく、日本仏教のあり方をフリースタイルに見つめ直しています。「お坊さん＝お葬式」というイメージを脱却し、仏教の持つ豊かな可能性に出逢うためのきっかけ作りとして「フリースタイルな僧侶たちのフリーマガジン」を発行しています。

■ 講座シリーズ #2 「無形文化遺産ってなに？」

日時	2017年11月4日(土) 17:00-18:30
会場	京都芸術センター フリースペース
講師	俵木 悟 (成城大学文芸学部准教授)

成城大学文芸学部准教授の俵木悟氏を講師にお招きし、「無形文化遺産」に関する条約が制定された経緯とその実情についての講演を行いました。

2003年に採択されたユネスコの「無形文化遺産の保護に関する条約」は、2013年の和食、2016年の山・鉾・屋台行事の代表一覧表への登録などによって、一般にも関心を集めるようになりました。「世界遺産の無形版」や「無形文化財の国際版」として紹介されることもありますが、実際にはそのいずれとも異なる、独自のコンセプトのもとに運用されています。

今回は、ユネスコの無形文化遺産保護の理念と、その意義や問題点について、特に「文化遺産は誰のものか」という点に焦点を当ててお話いただきました。



■ 講座シリーズ #3 「女流義太夫を知る」

日時	2018年2月17日(土) 15:00-16:30
会場	京都芸術センター 大広間
出演	太夫 竹本雛子 三味線 豊澤雛文
司会	小林昌廣 (情報科学芸術大学院大学教授)
対談	畑律江 (毎日新聞学芸部専門編集委員)

「女流義太夫」は、明治時代の中頃には一大ブームとなった、女性が太夫と三味線を勤める義太夫節です。高浜虚子や志賀直哉などの文豪も熱心なファンでした。当時のファンは、触りが語られるところで「どうするどうする」と合いの手を入れたことから「どうする連」と呼ばれていました。

今回は、竹本雛子氏(太夫)と豊澤雛文氏(三味線)を講師にお招きし、お話をうかがった後に、「御所桜堀川夜討」の弁慶上使の段の実演を披露していただきました。また、進行役の小林昌廣氏、畑律江氏との対談では、女流義太夫の魅力と、これからについてお話いただきました。



f 受託事業

— 札幌市教育文化会館 40 周年記念事業 金剛流能『松風見留』

■ 教文古典芸能シリーズ 金剛流能『松風 見留』



日時 2017年11月8日(水) 19:00-21:00

会場 札幌市教育文化会館大ホール

演目 シテ 豊嶋晃嗣
および ツレ 宇高德成

配役 ワキ 江崎欽次朗

アイ 茂山茂

後見 廣田幸稔、今井克紀、豊嶋幸洋

地謡 今井清隆、種田道一、金剛龍謹、
宇高竜成、山田伊純、惣明貞助

笛 竹市学

小鼓 成田達志

大鼓 亀井広忠

解説 小林昌廣(情報科学芸術大学院大学教授)

主催 札幌市教育文化会館(札幌市芸術文化財団)

共催 北海道新聞社

企画制作 伝統芸能アーカイブ&リサーチオフィス

後援 札幌市、札幌市教育文化会館

TAROは、主催者である札幌市教育文化会館と連携して、次世代へ向けて能楽を普及するプログラムを企画しています。

札幌市教育文化会館では、本格的な能舞台を使い日本の伝統芸能を紹介する「教文古典芸能シリーズ」を毎年開催しています。今年は開館40周年を迎える記念事業として、京都を代表する金剛流による能『松風見留』を取り上げ、解説を交えて上演しました。

『松風』は、能が確立される前に亀阿弥がつくった『汐汲』という曲を観阿弥が改作、さらに世阿弥が改修し、三代の能作者の手によって今の形になったと言われています。『松風』の小書(演出方法)は数多くありますが、「見留(みとめ)」は破之舞のトメに橋掛り・一ノ松へ行き袖をかずき、正先の松を深い恋慕の思いで見込みます。さらにキリでは、シテは袖をかずいてツレと共に謡の中で幕内へ消え去るというのが特徴です。最後の「松風ばかりや残るらん」とセリフを高音かつ一度で謡いきるとというのが、金剛流ならではの演出です。

— 狂言を取り入れた消費者啓発イベント

■ ～消費者問題を狂言で考えよう～



日時 | 2017年3月18日(土) 14:00-16:00

会場 | 金剛能楽堂

第1部 狂言

- 一、お話：島田洋海
- 二、「口真似」太郎冠者：茂山千三郎 主人：山下守之 客人：松本薫
- 三、「長光」すっぱ：茂山童司 田舎者：丸石やすし 目代：網谷正美

第2部 座談会

- 一、寸劇
 1. キッパリ断りましょう～訪問購入のトラブルについて～
 2. 渡さないで「キャッシュカード」教えないで「暗証番号」～キャッシュカード手交型の特殊詐欺について～
- 二、対談

茂山千三郎
池村隆兆(京都府消費生活安全センター)
柴田洋志(京都市消費生活総合センター)
山崎弥生(公益財団法人京都市芸術文化協会)

主催 | 京都市、京都府

制作協力 | 伝統芸能アーカイブ&リサーチオフィス

TARO は今年度、京都市と京都府が主催する「狂言」を取り入れた消費者啓発イベントに制作協力として参加しました。

第一部で狂言「口真似」、「長光」を上演した後、第二部では狂言師の茂山千三郎氏、島田洋海氏、山下守之氏とともに、京都市消費生活総合センター長の柴田洋志氏が、消費者問題をテーマとした寸劇を演じ、会場は大いに盛り上がりました。それに続く座談会では、寸劇でトピックとして取り上げた「訪問購入によるトラブル」と「キャッシュカード手交型の特殊詐欺」について、相談員の立場から問題のポイントを掘り下げて解説し、現実には直面した場合の解決策について議論を交わしました。

笑いとともに消費者問題を取り上げるといふ狂言ならではの催しとなりました。

— 発 行 —

伝統芸能アーカイブ&リサーチオフィス

〒604-8156 京都市中京区室町通蛸薬師下る山伏山町 546-2 京都芸術センター内

TEL 075-255-9600

FAX 075-213-1004

e-mail info@kac.or.jp

— 発 行 日 —

平成 30 年 3 月 31 日
